

映画部門

(100分)

R
U
N

O
U
T

三井
隆

元不良の守泉和斗（25）は、町工場で働いているが、給料は滞り闇金の瓜那甚三（44）の執拗な取立てを受けていた。守泉は、経営不振にもかかわらず根拠のない希望にすぎる工場に見切りをつけ、社長が街金で調達した五百万円と車を盗み、後輩の川堀浩邦（23）と共に、人生をやり直し強く生きようと逃亡の旅に出る。目指すは、敬愛する土方歳三終焉の地・函館。まず二人は、元手を増やすため、たこ焼き屋を始めるが食中毒を出し失敗。

アルバイト先のパチンコ店でも、赤ん坊が放置された車のドアガラスを叩き割ってクビになる。その場に居合わせた妖艶な美人・瑞野秋奈（36）に気に入られた二人は、秋奈が営むバーに招かれ、そのまま彼女の部屋にだれ込む。秋奈の娘・樹里亜（5）が、可愛がっていた野良猫がいなくなつたと告げるが秋奈は取り合わない。酔い潰れた川堀が寝込んだ後、守泉は秋奈と情事に耽り、「愛に飢えている」という秋奈に共感する。

翌日、秋奈の元夫で暴力団『青森組』幹部の土師弾男（39）が訪れ復縁を迫った。秋奈に断られ逆上した土師は、秋奈親子と川堀を人質に取って守泉を脅し、敵対する米山会組長を射殺するよう命じる。

米山会に向かう守泉の前に、街金から五百万円の債権を譲り受けた瓜那が取り立てに現れた。守泉は、組事務所に発砲し、米山会に捕らえられることで瓜那から逃れると、命懸けで組長に土師を始末するよう訴え、協力を取り付ける。守泉は土師を誘き出すが、土師も部下を潜ませており、米山会との間で銃撃戦になる。土師は流れ弾に当たり死亡、残酷な結果に秋奈は悲しみ、守泉を拒絶する。

なおも追いすがる瓜那を振り切った後、守泉は飛び出してきた猫を避け損なって事故を起こす。「あの子の猫のことを思い出した」と呟く守泉。「その優しさは強さの証し」と答える川堀。二人が絶命した頃、樹里亜は帰って来た猫を抱えて遠い空を見ていた。

人物

守泉和斗（25）（17）元不良で町工場従業員
川堀浩邦（23）（15）コンビニ店長。守泉の

後輩

瑞野秋奈（36）バーのママ
瑞野樹里亜（5）秋奈の娘

瓜那甚三（44）闇金の取立屋
土師弾男（39）暴力団『青森組』幹部。
秋奈の元夫

老松万吉（76）町工場社長
老松千代（70）老松の妻
加納摩利（18）コンビニのアルバイト
実田真（10）小学四年生
米山段五郎（65）暴力団『米山会』組長

工員 1

工員 2

工員 3

年配の婦人

コンビニ店員

児童 1

組 員 2	組 員 1	パ チ ン コ 店 主 任	真 の 母	保 健 所 職 員	児 童 3	児 童 2
-------------	-------------	---------------------------------	-------------	-----------------------	-------------	-------------

○資材置き場

パンクフアツションに身を包んだ守泉

和斗（17）、資材の上に寝転がって文

庫本『燃えよ剣』を読んでいる。

同じような格好をした川堀浩邦（15）、
慌てて走って来る。

川堀「大変だ、カズくん」

守泉「なんだ川堀、お前ひとりか。てか、その呼び方はよせ。テンション下がんだよ。

守泉さんとか、兄貴！　とか……」

川堀「今日の決闘、芹沢が出張って来るって聞いたら、みんなビビって逃げちゃったよ」

守泉、本を閉じて立ち上がる。

川堀「やっぱ止そうよ、こんな昔のヤンキーみたいな喧嘩」

守泉「……人間、万世に照らして変わらねえものがあるはずだよ。その変わらねえ大事なものをめざして男は生きてゆくもんだ」

川堀「何それ？」

守泉「今読んだ中にあった台詞さ。芹沢如き

が怖くて手放せるか。俺たちの居場所をよ」

守泉、本をポケットにしまおうと、資材から飛び降りる。

川堀「無茶だよ。相手は他にも何人……何十人来るか、分かんないんだよ」

守泉、右手にメリケンサックをはめる。

守泉「喧嘩上等！」

守泉、喜々として駆け出していく。

○タイトル

『RUN OUT』

○町工場・外観

T 『七年後』

古い小規模な町工場。

『有限会社老松製作所』の看板。

炎天下に蟬の鳴き声と金属を切削する作業音が混じり合う。

○同・作業場内

守泉和斗（25）、汗だくになりながら、旋盤で金属部品を切削している。何か多数の金属を床にぶちまける音。足元も覚束ない高齢の工員が、空の箱を手にうろたえている。床に散らばった無数のネジ。

守泉「シゲさん、無理に重い物運ばなくていいから、検査の方手伝ってなよ」

守泉、散らばったネジを拾い始める。その後ろを、工員1が歩き去り、作業場から出て行く。

○同・作業場入口外

工員1、携帯電話に怒鳴っている。

工員1「（中国語）送金どころじゃないよ。先月分だってまだ貰ってないんだ！」

○同・作業場内

ネジを拾い終えた守泉、旋盤に戻る。

工員2の声「守泉！」

守泉、声の方に振り向く。

作業場入口付近で手招きする工員2。

工員2 「来てるよ、高校ん時の先生。瓜那さん、だったつけ」

○同・事務室

瓜那甚三（44）と老松万吉（76）、応接で向かい合って座っている。

守泉、入って来る。

瓜那「よお、守泉。元気でやってるか。近くまで来たもんでな」

守泉、軽く会釈して近くの椅子に座る。

老松千代（70）が麦茶を持ってきてテーブルに置く。

老松「なんだ、愛想がないな。せっかく先生が来てくださったのに」

瓜那「いいんですよ社長さん。こいつは昔っからこうで……（麦茶を飲む）お前が立派に働いてるのを見るだけで、俺は満足だ」

無表情な守泉。

瓜那「では、二人で話がありますので」

瓜那、立ち上がる。

○同・廊下

瓜那と守泉、歩いている。

守泉「こう頻繁に来られると困るんすけど」

瓜那「家へ督促に行っても、お前いつもいな
いじゃねえか」

守泉「だからって……大体、先生って面かよ。

あんたいつ教員免許取ったんだ」

瓜那、立ち止まり、守泉の襟を掴んで

壁に押し付ける。

瓜那「文句は約定どおり金を返してから言え」

守泉「先月から給料出てないんすよ」

瓜那「んなこたあ、知ったこっちゃねえ」

瓜那、守泉を離す。

瓜那「今いくら持ってる。あるだけ出せ」

守泉、舌打ちをしてポケットを探り、

しわくちゃの千円札と小銭少々を出す。

瓜那、出された金をひったくる。

瓜那「これは遅延利息に充てとく。こんな
じゃ、いつまでたっても元金減らねえぞ」

瓜那、踵を返して立ち去ろうとする。

守泉「あの！」

瓜那、振り返る。

守泉「領収書ぐらいくださいよ」

○コンビニ・店内（夕）

守泉、入って来て、弁当コーナーに向
かう。

その先では、川堀浩邦（23）がおにぎ
りや弁当の入れ替えをしている。

守泉、陳列棚から弁当を取る。

守泉「これ、捨てるんだろ。貰っていいよな」

川堀「ダメだよ。こないだ、もうこれで最後
だって言ったじゃない」

守泉「ケチくせえ事言うなよ。川堀、お前店
長だろ。このぐれえ目をつぶれよ」

川堀「店長っていったって、ただの雇われ店
長だもん。廃棄食品の横流しなんて、オ―

ナーや本部に知れたらクビになっちゃうよ」
守泉「じゃ、悪いな」

守泉、弁当を持って歩き去る。

川堀「聞いてる？ちよとカズくん！」

○同・事務室（夜）

川堀、パソコンのモニターを見ながら
電話をしている。画面には売上高のグ
ラフが右肩下がりで表示されている。

受話器から怒鳴っている声が聞こえる。

川堀「すいません。俺……いや私の考えが
足りませんでした。頑張ります！」

ノックの音に続いてドアが開き、加納

摩利（18）が入って来る。

摩利「店長済みません。クレームのお客様が」

○同・店内（夜）

マルチメディア端末の前に、年配の婦
人が不機嫌そうな様子で立っている。

川堀、早足で近づく。

川堀「お待たせしました」

婦人「ちよつとこれ、どういふこと。チケットが買えないじゃない」

川堀「お求めのチケットというのは……」

婦人、情報誌の切り抜きを差し出す。

川堀、受け取って端末を操作する。

川堀「冰山つよしコンサート……ああ、全公演予定枚数終了になってますが」

婦人「だからどういふこと」

川堀「ですから売り切れです」

婦人「どうしてくれるの」

川堀「人気のある公演ですから、早めに予約されませんか、こういうことも……」

婦人「だからその今までチケットを手配してくれてたお友達の野山さんがね、息子夫婦と同居するからって、大阪に引っ越しちゃったのよ」

× × ×

川堀、がっくりと肩を落とす。

摩利、後ろに立っている。

摩利「あの……大丈夫ですか店長」

川堀「（振り返り） ああ、加納さん、いたの」

摩利「心配で……あのお客さん、凄い勢いだ
ったから。なんで店長が『つよしのドンゾ
コ節』歌わなきゃならないんですか」

川堀「まあ、もう大丈夫だよ。多分気が済ん
だと思うから」

摩利「本当に？ お疲れのようですけど」

川堀「そう言われると、疲れちゃったかな。

本部のお小言とクレーマーと、立て続けで」

摩利「だったら、あの……今度の土曜、私と

店長、休み同じですよね」

川堀「うん、そうだね」

摩利「とっても素敵な所に行きませんか。き
つと癒されると思っています」

川堀「えっ？ど、どこに？」

摩利「それは行くまで秘密。ダメですか」

川堀「だっ、ダメじゃないよ。全然！う、う
ん、行こう。行きましょう！」

摩利「わあ、良かった。店長には、いつも優

しくして貰ってるから……」

摩利、数珠の様なブレスレットを取り出し、川堀に渡す。

摩利「幸運のお守りです。嫌な事ばかりじゃなく、良いことが訪れますように」

川堀、歓喜のあまり声にならない。

摩利「それじゃ、お先に失礼します」

摩利、一礼して出て行く。

川堀、摩利に向かって手を振り、姿が見えなくなると店内をスキップする。

○町工場・事務室

老松を十数人の工員が取り巻いている。

その先頭に立つ守泉。

守泉「社長、俺達も耐えてきたがもう限界だ。

今すぐ給料を払ってくれ」

老松「済まない。今、あちこち心当たりを回っているから、もう少しだけ待ってくれ」

工員たちから非難の声が殺到する。工員1も中国語で捲し立てる。

工員 3 の声「静かにしろ！」

非難の声が鎮まる。

工員 3、事務室に入って来る。

工員 3 「なんだこの騒ぎは！」

工員 2 「決まってる。給料の支払い要求だ」

工員 3 「馬鹿野郎！」

工員 3、工員 2 を殴り倒す。

身構える守泉。

騒然となる工員たち。

工員 3 「苦しいのは百も承知だ。それを承知で俺たちはここに残ったんじゃないのか」

工員 2 「それは……」

工員 3 「給料が滞ったくらいで揺らぐほど、

俺たちの絆は脆いものだったのか」

守泉「今はそんな話をしてるんじゃないやねえ」

工員 3 「悲しいぞ守泉。俺たちは親父さんに命を預けたんじゃないのか」

守泉「預けた結果がこれだ。このままで受注が回復するとも……」

工員 2、立ち上がる。

工員2 「悪かったよ」

守泉 「おい、ここで折れるのか？」

工員3 「みんな、思い出せ。(歌う) 鋼の槌音

高らかに 今日も励もう我らが勤め……」

徐々に、守泉以外の工員たちが唱和して合唱になる。中には泣いている者も。

守泉 「阿呆か。やってらんねえ……」

守泉、事務室を出て行く。

工員3 「続いて二番！」

○ 駅前広場

川堀、時計を気にしながら立っている。ちぐはぐだが、精一杯恰好をつけてきた、という感じの服装。

摩利の声 「店長」

摩利、駆けて来る。

摩利 「お待たせしました」

川堀 「いやあ、そんなには……どこに行くのか、まだ秘密なの？」

摩利 「はい、でもとっても素敵な場所です。

じゃあ、行きましようか」

川堀、摩利と腕を組もうとするが、摩利、先に歩いていく。

川堀、『ま、いっか』という感じで行って行く。

○ホール内

ニコニコしている摩利。

呆気にとられ、呆然とした表情の川堀。

ホールが高齢者を中心に埋まっている。

中には、川堀が摩利から貰ったブレス

レットを着けている者も散見される。

壇上の僧侶の姿をした男が合図すると、

周囲の人間が念仏を唱える。

真剣な表情で念仏を唱える摩利。

川堀、口だけパクパクさせている。

○町工場・事務室・外（夜）

守泉、歩いて来る。

ドアが半開きになっている事務室から

聞こえる会話に気づき、立ち止まって
耳をそばだてる。

老松の声「五百万ある。これで遅れていた材
料費の支払いができる」

千代の声「でも、あなた、このお金は……」

老松の声「言うな。銀行も信金・信組はもう
どこもだめだ。街の消費者金融ぐらいしか」

苛立たし気な守泉。

守泉の心の声「街金から？」

千代の声「どうやって返すんですか。今まで
の受注先からはとくに切られているのに」

老松の声「これを払って、なんとか頑張る」

千代の声「なんとかって……そんな」

老松の声「頑張って、どうしようもなけりゃ、
その時は……なんでもするさ」

千代が低く忍び泣く声。

守泉、そつとドアの隙間から中を覗く。

老松が札束を金庫にしまう様子が見え
る。ダイヤル式の金庫を開錠する手元
を凝視する守泉の眼。

守泉、札束が金庫に収まるのを見届ける。

千代がドアに向かって歩いて来る。

守泉、物陰に身を隠す。

千代、顔を覆い守泉に気付かずにその場を去る。

○同・同・中（夜）

肩を落として座っている老松。

守泉、入って来る。

老松「守泉か……昼間は、済まなかったな。

お前一人を悪者にしてしまった」

守泉「いいよ、そんな事あ」

老松「だが、ようやく資金繰りの目途がついた。給料もいくらかは払えると思う」

守泉「悪いが、聞いちまったんだ。今の話」

老松「……そうか」

守泉「次の受注の当ては？」

老松、静かに首を横に振る。

守泉「だったら、従業員を減らさなきゃ」

老松「あいつらの首を切れと言うのか？　こ
こまでついて来てくれた彼らの……」

守泉「根性で頑張ればなんとかなるなんて、
そんな幻を見させてる方がよっぽど残酷だ」

老松「分かつてはいるんだ。だが……」

守泉「社長には世話になった。俺みてえなク
ズを拾ってくれたしな。俺はクビになっ
ても構わない。いや、そうしてくれ、社長！」

老松「何を言い出すんだ。お前こそ仕事の当
てはあるのか」

守泉「そんな事言っつてんじゃねえんだよ。こ
の工場を守るために、あんたは、そうしな
くちやいけないはずなんだ」

老松「済まない。もう少し考えさせてくれ」

老松、頭を抱えて俯く。

守泉、落胆した様子で立ち上がり、部
屋を出て行く。

○公園（夜）

勢いよく横っ面を引っぱたく音が響く。

頬を押さええている川堀と、右手を振り上げて泣きそうな摩利。

摩利「そんなことするなんて見損ないました」
狼狽する川堀。

川堀「（小声）いや、だって……いいじゃない
キスくらい……」

摩利「不潔です。教祖様の教えに反します！」

川堀「大袈裟だよ」

川堀、摩利に歩み寄る。

摩利、川堀の反対側の頬を引っぱたいて走り去る。

摩利「（走りながら）最低です、店長！」

○コンビニ店内

守泉、入って来て店員のいるレジカウンターに向かう。

守泉「店長はいるかい」

店員「私が店長ですが」

守泉「ん？ 川堀って奴は」

店員「ああ、その人なら、一週間前くらいか

ら出て来なくなっただんで」

○アパート・外観

外階段の二階建て安アパート。

守泉、見上げると階段を昇っていく。

○同・二〇一号室前

手書きの『川堀』の表札。

守泉、手荒くドアをノックする。

守泉「おい、川堀……どうした。いるんだろ」

○同・川堀の部屋・中

中はカーテンが閉め切っており、暗くてよく見えない。

川堀、続いて守泉が入ってくる。

守泉「どうしたんだよ。まさか俺が弁当持ってたせいでクビになったのか？」

守泉、窓の方に行こうとして何かに蹴躓く。

守泉「いてっ……こう暗くちや話もできねえ」

守泉、窓の傍に行きカーテンを開ける。
明るくなった室内の所どころに置かれ
た壺や妙な形の工芸品。

守泉「なんだこりや：：お前コンビニ辞めて
骨董屋でもやろうってのか」

川堀「カズくん、俺、もうダメだ。金もなく
なつたし、摩利ちゃんには嫌われるし」

守泉「何がダメなんだよ」

× × ×

川堀、布団の上に座っている。

守泉、室内の骨董品の類を見ている。

守泉「それじゃこれみんな、ナントカの会か
ら買った開運グッズなのか」

頷く川堀。

守泉「いくら惚れた女に勧められたからって、
貯金使い果たすことはねえだろう」

川堀、摩利から貰ったブレスレットを
着けた手首を見る。

川堀「お守りです、って言われてこれ貰って
舞い上がっちゃったんだよね」

守泉、座って傍らに積まれた新興宗教の出版物の山から一冊取って捲る。

川堀「これだけ買って教団に貢献したんだし、摩利ちゃんも喜んでたから、キスぐらいいいかと思つて……そしたらパチンつて」

川堀、自分の両頬を叩く仕草。

守泉「相手の性格も考えずに焦りすぎたな。とりあえず謝つて仲直りしときやどうよ」

川堀「でももう摩利ちゃんは出て来なくなつて、代わりにお父さんが怒鳴り込んできて」

守泉「親父が？」

川堀「うちの娘に何をしたつて。後はもう話に尾ひれがついて……バイトに手を出したエロ店長とか言われて……（段々涙声になる）店にも居づらくなって……」

守泉、川堀の隣に座つて肩を叩く。

川堀「このままいなくなりたいよ」

守泉、俯く川堀を見つめる。

守泉「……こんな時に悪いけどよ、今日は、別れの挨拶に来たんだ」

川堀、顔を上げる。

川堀「どういうこと？」

守泉「俺も工場辞めるんだ」

川堀「なんで？ 辞めてどこ行くの？」

守泉「そいつは聞くな」

川堀「待ってよ。今、カズくんまでいなくなったら、俺、どうしたらいいんだよ」

守泉、立ち上がって出口に向かう。

守泉「うるせえ、んなこたあ、自分で考えろ」

川堀、這って守泉の脚にすがりつく。

川堀「待ってよカズくん、置いてかないでよ」

守泉「離せ。しつけえぞ！」

守泉、川堀を振り払う。

川堀、泣きながら負けじとしがみつく。

守泉、川堀を蹴り倒す。

守泉「分かれよ！お前に泥棒を手伝えなんて言える訳ねえだろう！」

川堀「カズくん、泥棒すんの？」

守泉、口が滑って『しまった』という表情。

川堀「俺、やるよ。何が善くて何が悪いかなんて、もう分らないし、どうでもいい」

守泉「川堀……」

川堀「もう俺には何も残ってないんだ。なんだってやるし、どこへだって行くよ」

○町工場・外観（深夜）

○同・事務室（深夜）

真っ暗な室内。

懐中電灯を持った守泉、続いてバッグを抱えた川堀が入って来る。

守泉、金庫に取り付き、手元を照らしながらダイヤルを回す。

川堀、バッグを抱え、後ろからその様子を見ている。

金庫の扉が開く。

守泉、川堀からバッグを受け取り、金庫の中から札束を取り出して詰める。

川堀「社長さん、きつと困るだろうなあ」

守泉「やっぱビビってんのか、お前」

川堀、強く首を横に振る。

守泉、詰めた札束を眺める。

守泉「いや、確かにお前の言うとおおり、恩を
仇で返した卑怯者ってことになるんだろう
な、俺は……」

川堀「じゃ、やめとく？」

守泉「いや、やるさ。ありもしない希望にす
がって、弱い者が傷を舐め合って生きてる
……こんな所は俺のいる場所じゃねえ」

守泉、バッグを閉めると川堀に渡し、
手近の机の引き出しから車のキーの束
を取り出す。

○同・裏庭（深夜）

側面に『（有）老松製作所』を表示さ
れたワゴン車が置かれている。

守泉、ドアを開けて運転席に乗り込む。

川堀、助手席に乗り込む。

○走るワゴン車内（深夜）

運転席の守泉と、助手席の川堀。

川堀「これからどこ行くの」

守泉「そうだな、遠くだな」

川堀「考えてないの？」

守泉「京都か……いや、函館……函館に行く」

川堀「なんで函館に」

守泉「歳さんが、死んだ場所だからな」

川堀「としさん？」

守泉「そこを出発点に、俺は生き直すんだ」

川堀「……ああ、思い出した。歳さんって土

方歳三か」

守泉「俺はあの人みたいに生きたいんだ。ど

んな時でも、世の中の動きに惑わされず、

ひたすら強さを追い求めたあの人みたいに」

○国道（深夜）

ワゴン車が走り去っていく。

○公園前の道路

守泉のワゴン車がバックドアを開放して停まっている。

側面の会社名は消され、代わりに『たこ焼き』の文字。作業台やカウンター、LPガスボンベなどを備えた移動販売車両に改造されている。

作業台の傍には小麦粉の袋や材料を収納するケースなどが置かれている。

客が訪れている。

中で守泉がたこ焼きを作り、川堀が売っている。

川堀「ありがとうございます。またよろしく」

川堀、立ち去る客へお辞儀をする、守泉の方へ向き直る。

川堀「最初は思い切ったことするな、と思っただけど、なんとかかなりそうだね」

守泉「函館に着くまでに、少しでも元手は増やしておきたいからな」

川堀「車の改装とか、保健所の営業許可とか、割とすんなり行っただの、俺の伝手だから」

守泉「分かった分かった」

川堀「今日はさ、この近くで地域の祭りがあ
るんだよね。そっから客が流れて来ると思
うから、しつかり捉まえないと」

○同（夕）

ワゴン車の前で、守泉と川堀、ダレた
様子で座っている。

守泉「思ったより流れて来ねえな」

川堀「花火見に反対方向へ行っちゃうのかな」

守泉「お前の商売の勘も大したことないな」

川堀「カズくんよりはマシだと思っけどな。」

第一、俺は高校卒業してるし」

守泉「やかましいや！」

守泉、川堀を羽交い絞めにする。

真の声「なんで僕だけ出歩いちゃいけないん
だよ！」

守泉、川堀、声のした方を振り向く。

× × ×

ワゴン車から十数メートル先で、実田

真（10）が、同学年と思しき児童1、2、3に小突かれている。

児童1 「おお、怒った差別主義者」

児童2 「お前がいると雰囲気が悪くなる」

児童3 「そうだ、寄るな差別主義者」

児童1、真の持っていたバッグを引つたくり中身を道路にぶちまける。

児童1が駆け出すと、児童2、3も続いて駆け去っていく。

残された真、半べそで落ちている文房具や漫画本を拾い集めて鞆にしまう。

川堀、真に歩み寄る。

川堀 「大丈夫？ 酷い奴らだなあ」

真、堰を切ったように泣き出す。

守泉、歩いて来る。

守泉 「泣くな」

× × ×

真と川堀はワゴン車の前に座り、守泉は少し離れて立っている。

真 「……クラスに障害を持った子がいるんで

す。手足も不自由だし、その……あんまり
勉強にもついていけないみたいで」

川堀「ふんふん」

真「みんなで学校の行き帰りに付き添ったり、
勉強を見てあげたりしてたんだけど」

川堀「その子と、さっきの子たちが言ってた
差別主義者ってのは何か関係あんの」

真「僕は差別なんかしてない。ただ、養護学
校には行かないのかな、って言っただけ」

川堀「それで差別だって騒いでるのか」

真「僕はそんなに悪い事言ったんですか？」

真、再び涙目になる。

守泉「お前、名前なんていうんだ」

真「……実田……真」

守泉「マコトか。どういう字だ」

真「真実の真……」

守泉「そうか、言扁に成る、じゃないのか」

川堀「こんな時に新選組持ち出さなくても」

守泉「まあいいや。いいか、その子のために
どうするのがいいか、なんてお前らガキに

分かりっこねえ」

真「じゃあ、やっぱり僕は間違つて……」

守泉「そうじゃねえよ。正しい答えなんか誰にも分からねえってだけだ」

守泉、たこ焼きのパックを持ってきて真に差し出す。

守泉「食え」

真「僕、お金ありませんけど」

守泉「要らん。どうせ売れりだ」

真、たこ焼きを食べ始める。

守泉「さっきの奴らは、お前を責めておきながら、実は自分たちが差別をしてたんだ。

そんな奴らに負けるな。堂々としてろ」

川堀「そうそう」

真、頷く。

○同

ワゴン車で出店中の守泉と川堀。

川堀「今日もあんまり来ないねえ」

川堀、ワゴン車から少し離れてスマー

トフォンを車に向ける。

川堀「カズくん、こっち向いて」

守泉が顔をあげると、カメラのシャッターを押す。

守泉「お前何やってんだ」

川堀「Fake Bookに載せようと思って。

少しは宣伝になるかも」

守泉「バカ、やめろ」

守泉、車から出て来て、川堀のスマートフォンを取り上げる。

川堀「何するんだよう」

守泉「これお前の本名が出てるんだろ」

川堀「そだよ。車の改装の相談に乗ってくれた屋代さんもお友達」

守泉「阿呆。足がつく情報垂れ流すな」

川堀「そうか、ごめん」

二人、ワゴン車に戻る。

保健所職員と真の母がやって来る。

職員「川堀浩邦さんですか」

川堀「そですけど、何か」

保健所職員、身分証を見せる。

職員「保健所の者です。中を見せてください」
真の母「よく調べてください。絶対ここに決まってるんですから」

保健所職員、ワゴン車の中に入り、設備をあちこち点検している。

守泉と川堀、当惑している様子。
買いに来たと思しき通行人、この様子を見て、去っていく。

真の母「(通行人に)ここはやめた方がいいですよ。不衛生ですから」

守泉「ちよつとあんた、営業妨害しないでもらえるか」

真の母「よくもそんなことが……うちの子に変な物を食べさせておいて」

川堀「もしかして……真君のお母さん」

真の母「昨日から気分が悪い、お腹が痛い……聞いたらこここのたこ焼きを食べたつていうじゃないですか」

職員「食中毒の疑いがある。まだ断定はでき

ませんが。川堀さん、ちよつとこちらへ」

川堀、不服そうにワゴン車に入る。

保健所職員、川堀にあれこれと訊ねている。

守泉「あいつ……いや、真君はどうしてます」

真の母「大事を取って入院させました」

守泉「いや、ダチ……友達と上手くいってねえみたいだったから」

真の母「今はそれどころじゃありません！」

× × ×

ワゴン車の前に並ぶ守泉、川堀。

その前に保健所職員。少し離れて真の母が立っている。

保健所職員、手元の書類に目をやり、職員「結果は追ってお知らせします。では」

保健所職員と真の母、立ち去る。

○町工場・外観

瓜那、歩いて来て立ち止まる。

救急車やパトカーが停まっている。

警官の行き来する姿も見える。

工員2が出て来る。

瓜那「失礼。何があつたんです」

工員2「ああ、先生……実は、親父さんが」

千代の声「あなた、あなたあ！」

救急隊員が全身をシートで覆われた遺体を担架に載せて救急車に運んでいる。

千代、それにすがりついて泣き叫ぶ。

工員2「それはそうと、守泉と連絡が取れな

いんです。先生、何かご存知ありませんか？」

瓜那「守泉が……さあ、私は何も……」

工員2「仕入先に払うはずだった五百万とワ

ゴン車が一台、なくなつてゐるんです。疑い

たくはありませんが、もしかして……」

苦々し気な瓜那。

○走るワゴン車内（夜）

守泉、黙々と運転している。

一枚の紙を手に、悔しそうな助手席の

川堀。それは営業許可取消し処分通知。

川堀「こんなの納得いかないよ。俺ちゃんと衛生管理してたし」

守泉「しようがねえだろ」

川堀「実田さんに見舞金まで払って。俺たちが悪いつて認めたようなもんじゃないの」

守泉「もうそれで収めたんだ。文句言うな」

川堀「それでいいの？ あの子には堂々としてろって言っついて、このザマ？」

守泉「俺だって承知はしちやいねえ。だけど、今下手に騒ぎを大きくするわけにはいかねえんだ。我慢しろ」

○守泉のアパート前の道路

スマートフォンで話しながら、瓜那が出て来る。

瓜那「ええ社長、例の街金から債権譲渡のあった五百万、工場から回収するのは厳しいでしょう。社長が首吊って、婆さんは文無し……当然工場・自宅は銀行の抵当が……税金滞納で動産も差し押さえられています」

瓜那、登記簿を捲る。

瓜那「やはり盗んで逃げた守泉を締め上げる

しかないと思います……たまたま私の『客』
だった訳ですが……では、また連絡します」

瓜那、電話を切ると、スマートフォン
を操作、川堀のSNS画面を呼び出す。

瓜那「守泉が昔からつるんでたこいつもいな
くなってる。それなら……」

○スマートフォン画面

写真が次々にスライドしていく。

その中には守泉が写っているものも。

瓜那の声「この川堀って奴も一緒のはずだ」

『プレゼント貰っちゃいました！』の
題名と共に、川堀が摩利から貰ったブ
レスレットのアップ写真。

○元のアパート前道路

スマートフォンを操作する瓜那。

瓜那「さしあたり、車と……こいつのフォロ

ワーを辿ってみるか……」

○パチンコ店・外観

郊外の幹線道路沿いにある大きなパチンコ店。多くの車が駐車している。強い日差しが容赦なく照りつける。

○同・駐車場

パチンコ店の制服を着た川堀、ごみを拾い歩いている。

川堀、一台の車を見て、訝しげに近づき、中を覗いて驚く。

○同・ホール内

どのコーナーも客が一杯の店内。

制服を着た守泉、他の店員に混じって、玉運びや吸い殻の清掃など、忙しく働いている。

川堀が客の間を縫って駆け込んで来る。

川堀「カズくん、そ、外……」

守泉「なんだよ。邪魔だ」

川堀「いいから来て！」

川堀、守泉の手を引っ張る。

○同・駐車場

川堀、守泉を先刻の車へ連れて来る。

守泉、車の中を覗く。

車内で、赤ん坊が泣いている。

守泉、ドアノブを何度か引くが、鍵が

かかって開かない

ダッシュボードの上に置かれた温度計

が四十度以上を示している。

川堀「エアコンが切れてるみたいなんだ。こ

のままじゃ、この子死んじゃうよ」

守泉「すぐ親を呼び出してもらえ。いや、俺

が行く。お前は一一九番だ」

川堀「うん！」

川堀、スマートフォンを取り出す。

守泉、店の建物に向かって走って行く。

イーバーに熱狂している二十代の女性。

× × ×

ホール内の光と音の洪水。

守泉、意を決したようにホールを出て行く。

○同・事務所裏

店員のもの思しき車数台が停まっている。その中にたこ焼き屋の文字が残るワゴン車。

守泉、ワゴン車を開け、工具箱を取り出す。

○同・駐車場

件の車の傍で、川堀、心配そうに車内を見ている。

赤ん坊の泣き声が漏れて来る。

守泉、工具箱を持って走って来る。

守泉「救急車はまだか。クソ、何やってんだ」
川堀「親は？」

守泉、首を振る。

○（フラッシュ）同・ホール内

パチンコに興じる客の波。

赤ん坊の親と思しき女性客。

○同・駐車場

車の横に立つ守泉と川堀。

赤ん坊の泣き声。

守泉、工具箱からスパナを取り出す。

川堀「あっ、カズくん……」

スパナを握り締め、怒りの形相の守泉。

○（フラッシュ）同・ホール内

光と音の洪水。

○同・駐車場

守泉、スパナを振り上げる。

○（フラッシュ）公園前の道路（夕）

真の靴を取り上げ、中身を地面にぶちまける児童たち。

○パチンコ店・駐車場

守泉、ドアガラスをスパナで力一杯叩く。ガラスにヒビが入る。
止めようとする川堀を振りほどいて、
なおも叩く。

○（フラッシュ）川堀の部屋

部屋一杯に置かれた骨董品。

○（フラッシュ）町工場・事務室

社歌を歌い、涙する従業員たち。

○パチンコ店・駐車場

守泉、片側のドアガラスを叩き壊す。

川堀「カズくん！もういい。もう十分だって！」

守泉、スパナを持った手を下す。

地面に落ちるスパナ。

川堀、車内から赤ん坊を助け出す。

周囲には人ばかりが出来ている。

その中に混じって様子を見ている瑞野

秋奈（36）。

救急車のサイレンの音が近付いて来る。

○道路

瓜那、スマートフォンを操作している。

○スマートフォン画面

屋代某の Fake Book 画面。

『知り合いのコンビニ店長さんが訪ねて来て、一緒に飲んでます』とのコメントと共に、居酒屋店内の写真。

顔は写っていないが、ブレスレットをした川堀の腕が写っている。

場所の表示は埼玉県内の地名。

○元の道路

瓜那、スマートフォンを凝視している。

瓜那「これはあいつだな。北に逃げたか……」

○パチンコ店・駐車場

救急車が到着し、野次馬が取り巻く中、救急隊が赤ん坊の救護を行っている。

守泉と川堀、立ち去ろうとしている。

秋奈の声「待って」

守泉と川堀、声のした方に振り返る。

秋奈が歩いて来る。ちよっと妖艶な雰

囲気を湛えた美人。

秋奈「やるじゃない。気に入った」

川堀「すぐ救急隊が来たし、俺たち何も……」

秋奈「車の中に赤ちゃん置いてたんでしょ。

まだそんなことする親がいるんだね。酷い」

秋奈、紙片を取り出し川堀に渡す。

バーの名刺。『バーしゃくなげ』のロゴ

と所在地、電話番号がある。

秋奈「私がやってる店。よかったら来て」

秋奈、去っていく。

○パチンコ店・事務室（夜）

守泉と川堀、並んで立っている。

主任、その前で足を組んで座っている。

主任「呆れて物が言えんよ。お客様の車のガラスを叩き壊すとは、何を考えてるんだ」

川堀「赤ちゃんを助けようと必死で……」

主任「待ってれば、救急のレスキュー隊が開けてくれたんじゃないのかね」

川堀「それは結果論でして、あの時は一分でも早く助けないと、ってもう必死で」

守泉は黙ったまま。

主任、立ち上がり、川堀に薄い封筒を押し付ける。

川堀「あ、金一封をいただけ……」

主任、川堀を睨みつける。

川堀「……訳、ありませんよねえ……」

主任「これまでのバイト代だ。勿論、ガラスの修理代は差し引いてある」

川堀、力なく笑う。

主任「出て行け。クビだ」

○同・裏口（夜）

守泉と川堀が出て来る。

川堀「カズくんは間違っていないよ。うん」

守泉「あの時、お前が止めなければ、俺はガラスを全部叩き割っていただろう……」

川堀「え？」

守泉「俺は……本当に赤ん坊を助けようとしたのか？ 分からねえ……」

川堀「もう、済んだことだよ。次どうするか考えようよ……ああそうだ」

川堀、紙片を取り出す。

川堀「さっきのお姐さんの店に行ってみよう。いい気晴らしになるよ」

守泉「……好きにしろ」

○繁華街（夜）

地方都市の繁華街の裏通り。

酒場や風俗店などが建ち並び、派手な

看板が軒を連ねている。

その中に『バーしゃくなげ』の看板。

○バー『しゃくなげ』・店内（夜）

カウンター席のみ十席程度の店内。

客は一人。

川堀と守泉、入って来る。

カウンター内に先刻より濃い化粧をして胸元の開いた服を着た秋奈がいる。

川堀「今晚はー」

秋奈「あー、来てくれたんだ。ありがとう」

川堀「当然です！」

秋奈、着席を促す。

守泉と川堀、先客と離れた席に座る。

秋奈「何にする？」

川堀「バーボン、ロックで」

秋奈「そちらの彼は？ブランデーでも、ワインでも、一通りはあるけど」

守泉「日本酒」

× × ×

川堀と守泉、カウンター越しに秋奈、それぞれグラスを持っている。

秋奈・川堀「乾杯！」

守泉、川堀、秋奈、乾杯する。

守泉、グラスの酒を一気に呷ると、枡の中の酒をグラスに注ぐ。

秋奈「川堀君と、守泉君……さっきの話、よく思い切った行動に出られたなあって」

川堀「とにかく夢中で。お陰でクビになりましたけど」

秋奈「え、そうなの？可哀想。悪いのは親なのにね。私にも娘がいるから、ああいうの許せなくて」

川堀「結婚……されてるんですか。そりゃあそうですね」

秋奈「今はシングルだけどね」

秋奈、守泉の開いたグラスに日本酒を注ぐ。

秋奈「じゃ、ごゆっくり」

秋奈、二人から離れ、先客に應對する。

川堀、秋奈を目で追う。

川堀「ああ、綺麗だなあ秋奈さん」

× × ×

先客が帰り、秋奈、入口で見送る。

秋奈 「ありがとうございました」

秋奈、守泉と川堀の所に戻って来る。

秋奈 「私も貰っていいかな」

守泉 「勿論」

川堀 「どうぞどうぞ」

秋奈、ブランデーのボトルとグラスを
持って来て二人の前に座る。

秋奈、ブランデーを注ぎ、

秋奈 「二人はどういう関係？」

守泉 「（川堀を指し）高校ん時の後輩で」

川堀 「そんな時からの腐れ縁です」

守泉 「お前が言うな」

秋奈 「どんな生徒だったの。部活とかは」

川堀 「この人はもう、殴り合いばっか」

守泉 「うるさい」

秋奈 「殴り合い…：ああ、ボクシングとか」

守泉 「まあ、そんなところっス」

川堀 「俺がやめろっていうのに出掛けてって
ボコボコにされて。で、結局退が…：く、

苦しい」

守泉、川堀にヘッドロックを掛ける。

秋奈、意味が分からない様子。

× × ×

守泉、川堀、秋奈、それぞれかなり酔
酩している。

川堀「じゃ、今は娘さんと二人暮らし」

秋奈「そう。写真見る？樹里亜っていつてね、
すごく可愛い。私にそっくりで」

秋奈、スマートフォン画面を見せる。

秋奈「ほらほら、これ、今五歳」

川堀「うんうん、可愛い。でもなんで別れち
やっただんですか。この子のお父さんと」

秋奈「まあ、いいじゃないどうでも。要はD
Vよ。よくある話でしょ」

秋奈、懐を探り、小さなマスコット人
形を取り出す。

秋奈「これ、樹里亜とお揃い。幸せを呼ぶお
守り、みたいな」

川堀、真顔になり、泣き出す。

川堀「幸せの……お守り……（号泣）ま、摩利ちゃあーん！」

秋奈「あれえ、川堀君、どうしちゃったの？」

テーブルを叩く川堀の腕に、摩利から貰ったブレスレット。

守泉「なんだお前、まだそれ着けてたのか」

秋奈「ホントにどうしたのいきなり」

守泉「女から貰ったんすよ、それ。お守りだとか言われて。結局振られたけど」

川堀「軽々しく摩利ちゃんを女とかいうな！」

守泉「なんだよ、お前を変な宗教に引き摺り込んだ、たちの悪い女じゃねえか」

川堀「違うよ。カズくんでも許さないぞ」

川堀、守泉を小突き始める。

守泉「グチグチと、情けねえ野郎だな」

秋奈、カウンターを回って、二人の間に無理矢理割って入る。

守泉、席を一つずれる。

秋奈「ほらほら鼻かんで」

秋奈、川堀にティッシュを取ってやる。

川堀、泣きながら鼻をかむ。

秋奈「ごめんなさいねえ、そんなつもりじゃなかつたんだけど……」

川堀「あ、秋奈さあん……！」

川堀、秋奈に泣き付いて、そのまま胸に顔を埋める。

秋奈、笑って川堀の頭を撫でてやる。

守泉「川堀、てめえ！」

秋奈「こら、妬かないの」

秋奈、笑って守泉の肩も抱き寄せる。

秋奈「二人とも可愛いなあ！泊まるよこないんでしょ。うち来る？」

○秋奈のマンション・外（深夜）

中層のやや古びたマンション。

タクシーが走ってきて停まる。

泥酔した秋奈、守泉、川堀がふらつきながら出て来る。

○同・玄関中（深夜）

ドアが開いて、秋奈が入って来る。

続いて、川堀が入って来て秋奈に寄りかかり、そのまま二人とも倒れ込む。

秋奈「(悲鳴を上げつつ笑う) ダメダメ、ここ
で寝ちゃ」

川堀は前後不覚。

守泉、入って来てドアを閉め、川堀の靴を脱がす。

守泉「こんなになるまで飲む奴だったかなあ」

○同・居間(深夜)

守泉、川堀を引っ張って来て、空いている床に寝かせる。

秋奈、水の入ったコップを持って来る。

秋奈「お水、飲ませた方が」

守泉「すみません……おい川堀、起きろ」

秋奈「無理に起こさなくていいよ」

瑞野樹里亜(5)、入って来る。

樹里亜「ママ……」

秋奈「樹里亜、寝てなかったの？」

樹里亜「あのね、ミーちゃんがなくなったの」

守泉「いなくなった？」

秋奈「ああ、野良猫よ」

樹里亜「ママ、一緒に探して」

秋奈「また、ミーちゃんに餌をあげに行ったの？ ご近所の迷惑だからダメって言ったでしょ」

樹里亜「だって……」

秋奈「ママはお兄さんたちとお話があるの。

もう遅いから部屋で寝なさい」

樹里亜「でも、ミーちゃんお腹空かせて」

秋奈「お部屋に行きましょう」

秋奈、樹里亜を促す。

守泉「猫、明日俺が探してやるよ」

守泉を見る冷やかな樹里亜の眼。

秋奈、樹里亜を連れて出て行く。

× × ×

川堀、何事か呟きながら寝ている。

守泉、うな垂れて座り込んでいる。

秋奈、よろよろと戻って来る。

秋奈「これじゃ、飲み直すどころじゃないよねえ。寝ますか」

守泉「俺たちはここに雑魚寝で十分ス」

秋奈「そうもいかないでしょ」

秋奈、川堀の肩を叩く。

秋奈「起きて……（声を裏返す）ヤッホー、

川堀君、マリだよー」

川堀、がばっと起き上がる。

秋奈「わあ！」

川堀「嘘つけ。摩利ちゃんはその様な軽い喋り方するもんか」

川堀、秋奈の顔を見る。

川堀「それに、こんなに歳いってないやい」

守泉、川堀の後頭部をはたく。

川堀「なんだよう、みんな俺の傷口つつき回して……クソ、こんな物！」

川堀、ブレスレットを外して放り投げ、
忍び泣く。

守泉「ここまで引き摺ってたとはなあ……」

秋奈、川堀を慈しむ様な眼差しで見つめる。

秋奈「ごめんね。辛かったのにね……立てる？
ベッド行こう」

秋奈、川堀に肩を貸し、一緒に立ち上がる。

守泉、肩を貸そうとする。

秋奈、優しく微笑んで、

秋奈「暫く、ここにいてくれる？」

守泉、秋奈を見つめ返し、頷いて半歩下がる。

秋奈、川堀と共に部屋を出て行く。

× × ×

守泉、座って缶ビールを飲んでいる。

奥から微かに川堀と秋奈の声が聞こえて来る。

川堀の声「秋奈さん……秋奈さあん！」

秋奈の声「駄々っ子だなあ君は。私はいなくなったりしないよ……」

× × ×

守泉、座ったままうつらうつら寝ている。

シャワーの音が聞こえている。

テーブルの上に潰れたビールの缶。

守泉、ゆっくりと目を開ける。

× × ×

守泉、ぼうつとして座っている。

スリッパの摺り足が聞こえ、秋奈、入口にバスタオルを巻いただけの姿を現す。メイクは落としており、缶ビールを持っている。

守泉「あ、すみません。ビール、貰いました」

秋奈、守泉の横に座って缶ビールを開ける。

秋奈「川堀君、寝ちゃった」

守泉「そうスカ……ありがとうございます」

秋奈、ビールを一口飲む。

秋奈「御礼言われるようなことじゃない」

守泉「それでも……あいつを、いたわってくれたことに、感謝します」

秋奈「律儀だなあ。私はね、愛に飢えてる人
を見ると、放つとけないだけ」

守泉「……飢えてる、か……」

秋奈「それで救われるかどうかなんて分から
ないのに」

守泉「根が優しいんでしょう。秋奈さんは」

秋奈「ううん、自分でも分かってるんだ。誰

よりも私が飢えてるから」

守泉「ビールもう一本貰っていいスカ」

秋奈「駄目」

守泉、立とうとする。

秋奈、手で制してビールを口に含む。

秋奈、守泉に口移しで飲ませる。

動く守泉の喉。

守泉、秋奈を抱き寄せて、貪る様に唇
に吸い付いていく。

守泉、秋奈に覆い被さるように倒れ込
む。

○同・樹里亜の部屋（深夜）

ぬいぐるみや女兒向け玩具などが置かれたいることが辛うじて分かる薄暗い室内。

秋奈の喘ぐ声が、微かに聞こえて来る。
樹里亜、布団の中で目を開けている。
秋奈の声から逃れるように、耳を塞ぐ。

○同・居間（深夜）

パンツ一丁の守泉と、バスタオルを巻いた秋奈、寄り添って寝ている。

守泉「一つ、訊かせてください」

秋奈「何？」

守泉「飢えが、満たされたことってありましたか」

秋奈「どうだろう：：これが本当の愛だっと思えたこともあったけど、今考えると、どうだろう：：分かんないや」

守泉「似てるな：：俺と」

秋奈「え？君と？」

守泉「求めても、手に入らない：：秋奈さん

とは求めるものは違うけど」

秋奈「守泉君が欲しいものって？」

守泉「俺は、強くなりたいたんだ」

秋奈「（吹き出して笑う）」

守泉「そんなに可笑しいスカ」

秋奈「ごめん、あんまり唐突だったんで」

ムツとする守泉。

秋奈「でも、そんな君のもがきを嗅ぎ取った

からかなあ、駐車場で声、掛けたのは」

守泉「もがき……」

秋奈「車のガラスを叩き割ってるところ」

守泉「ああ……でも暴力は嫌いなんじゃ」

秋奈「あれはDVとは違うよ……ちよつと冷えてきちゃった。なんか着ないと……」

秋奈、立ち上がったって部屋を出て行く。

○同・居間（朝）

陽が差し込んで、外から雀の泣き声が聞こえる。

守泉、むっくりと起き上がる。

○同・台所（朝）

秋奈、バタバタとごみを袋に詰めている（服は着ている）。

服を着た守泉、入口付近に立つ。

秋奈「ああ、起きた」

守泉「（軽く会釈）ウス」

秋奈「もう回収車が来ちやうかな……ゴミ出して来たなら、何か作るから」

秋奈、ごみ袋を持って出て行く。

守泉、所在無げに部屋を見回す。

玄関のドアが開く音。

秋奈の声「（短い悲鳴）……なんであんたが！」

揉み合う音と玄関ドアの閉まる音。

守泉、はっとして玄関に向かう。

土師の声「今日こそ承知してもらおうぞ。やり

直そうぜ、な、秋奈」

○同・玄関中（朝）

土師弾男（39）、秋奈を部屋の中へ突き飛ばす。

出て来た守泉、秋奈を受け止める。

守泉「……と！ どうした、秋奈さん！」

秋奈「待ち伏せしてたのよこいつ！ ドアを

開けた途端に踏み込んで来て……」

守泉、土師を睨みつける。

秋奈「私の、元旦那……」

守泉「それがなんで急に……」

土師「誰だおめえ」

秋奈「気を付けて、こいつ……ヤクザなの。

何するか分からないよ」

守泉、土師に殴り掛かる。

守泉「出て行け！」

土師「おもしれえ」

守泉と土師、取っ組み合いになる。

川堀、寝ぼけまなこで出て来る。

川堀「何？うるさいなあ……」

守泉「川堀！手を貸せ、二人でこいつを……」

川堀「え？」

土師、拳銃を取り出し、銃把で守泉を殴りつける。

秋奈「守泉君！」

守泉、その場に崩れ落ちる。

川堀「か、カズくん！」

川堀、ようやく事態が飲み込めて来た様子。だが、硬直して動けない。

土師が拳銃の銃口を向けている。

○同・居間（朝）

土師、玄関に近い方で、拳銃を弄びながら胡坐をかいている。

秋奈、川堀、守泉、部屋の片隅に寄り集まって座っている。

守泉は頭に氷嚢を当てている。

樹里亜の声「ママ、幼稚園は？」

秋奈「お部屋にいなさい。ママがいいというまでこっちに来ちゃ駄目よ」

土師「おいおい、樹里亜の顔を見させてくれないよ。久し振りにパパが会いに来たんだぞ」

秋奈「拳銃チラつかせて何がパパよ。裁判所の接見禁止命令、忘れたとは言わせない」

土師「お前こそ、若い男を二人も連れ込んで
何がママだ」

秋奈「あんたには関係ない」

土師「あるさ。よりを戻そうと来たら変な虫
が付いてやがった」

土師、守泉と川堀を睨む。

土師「てめえら、人の女房寝取った落とし前、
キツチリつけさせてもらうからそう思え」

秋奈「しつこい！ あんたとはとつくに離婚
が成立してるの。さっさと帰って！」

土師「そういう気の強いところが堪んねえ」

土師、秋奈に手を伸ばす。

秋奈、土師の手を払い除ける。

土師、払い除けられた手で秋奈を平手
打ちする。

秋奈「あっ！」

秋奈、床に倒れる。

川堀「秋奈さん！」

守泉「やめろ、てめえ！」

秋奈、凄みを効かせた眼差しで土師を

睨む。

秋奈「……そういう所が駄目だっっていうのに、まだ分からないの？ 何度言われても答えは同じ。あんたとはもう二度と一緒にいることはない。絶対に、お断りします！」

土師「秋奈、お前は……」

土師、気色ばむ。

秋奈、怯まず。

守泉と川堀、身構える。

土師「なんで分かってくれないんだよお！」

守泉と川堀、拍子抜け。

呆れた様子の秋奈。

土師、拳銃を持ったまま、身をよじる。

土師「米山会の連中にうちの若いもんが何人もやられてんだよお。次はきつと俺だあ」

土師、半泣きでじたばた手足を動かす。

守泉、川堀と目で合図して、土師に飛

び掛かろうと身構える。

土師、さっと二人に銃口を向ける。

土師「おかしな真似しやがるとぶっ殺すぞ」

守泉と川堀、元の位置に座る。

土師、再度駄々を捏ね始める。

土師「俺あ、いつ死ぬか分かんねえし。このまんま看取ってくれる女もいないまま死ぬのは嫌だあ……秋奈、お前じゃなきやダメなんだよ、俺あああ（泣く）」

守泉、土師に飛び掛かり、拳銃を奪おうと揉み合う。

土師「懲りねえ野郎だな」

守泉「てめえはこの人を不幸にするだけだ！」

川堀も遅れて飛び掛かるが、土師に蹴り飛ばされる。

土師「このクソガキ！」

土師、守泉の後頭部を殴る。

守泉、堪らずその場に崩れ落ちる。

土師、拳銃を構え直す。

土師「死にてえか、てめえら」

秋奈、立ち上がる。

秋奈「全然変わってないね。そういう弱っちい所も……」

土師「秋奈、頼む。考え直してくれ」

秋奈、首を振る。

秋奈「そんな弱いあなたの力になってあげた
いと思ったこともあったけど、もう無理。

樹里亜を危険に巻き込む訳にはいかない」

土師、長い嘆息。

土師「そうかよ。分かったよ。お前との復縁
は……諦める」

川堀「では、あの、お引き取り願える……と
いうことで、宜しいでしょうか」

土師「そうはいくか、馬鹿野郎！」

川堀「ひっ！（身をすくめる）」

土師「お前が元の鞆に収まってくれたら、も
う思い残すことは何もねえ、米山会の組長
を相討ち覚悟で殺るつもりだった」

守泉、頭を押さえながら顔を上げて土
師を見る。

土師「だが気が変わった。こうなりやどんな
に無様な姿を晒しても生き残ってやる！」

次は何を言い出すのかと不安気な秋奈。

土師、守泉に銃口を向ける。

土師「おい小僧、てめえ鉄砲玉になれ」

守泉「なん、だって？」

土師「俺の代わりに米山段五郎を殺して来い」

秋奈「馬鹿言わないで！守泉君はヤクザでも

なんでもないのよ！」

土師「今、命に懸けても、とかなんとか抜かしやがったよなあ」

守泉、土師を睨み返す。

土師「証明して見せろ。その覚悟をよ」

守泉「そいつを殺したら、二度とここには来ないんだな」

土師「ああそうだ。だが、サツなんかに垂れ込んだらお前の弟分の命はないと思え」

守泉「分かってるよ。こっちだって警察には関わりたくない」

怪訝そうな秋奈。

土師「へえ、お前何やったんだ」

守泉「あんたには関係ない」

守泉、出て行く。

○ 駅・外観

地方ローカル線の駅舎。

○ 同・コインロッカーコーナー

守泉、コインロッカーの扉を開ける。
中には小さな鞆。

土師の声「コインロッカーにマカロフを一丁置いてある。そいつを使え」

守泉、鞆を少し開けて中身の銃を確認すると、鞆を閉めて取り出す。

○ 商店街

守泉、鞆を抱えて人混みの中を歩いている。

土師の声「米山を仕留めて安全な所まで逃げたら俺に連絡しろ。それまでは二人……」

○ 秋奈のマンション・居間

配線を切られた電話機。

秋奈と川堀、緊張した様子で部屋の隅

に座っている。

テーブルの上には川堀と秋奈のスマー
トフォンが置かれている。

土師、拳銃を持ったまま、缶詰や即席
食品などを食っている。

○同・樹里亜の部屋

樹里亜、布団の上で不安そうにうずく
まっている。

土師の声「いや、三人は俺が見守ってるよ」

○繁華街

秋奈のバー近くの繁華街。

守泉、コイン駐車場に向かって歩いて
行く。

○コイン駐車場

守泉、ワゴン車の運転席のドアを開け
ようとす。

瓜那の声「探したぞ、守泉」

守泉が振り向くと、瓜那が歩いて来る。

守泉「てめえ、なんでここに……！」

瓜那「世の中猫も杓子もブログだSNSだって、情報を絶えず垂れ流してる。ま、そいつを手掛かりにあちこち当たれば、な」

守泉「あんたも相当暇なようだな。他の客んところはいいのかい」

瓜那「お前の借金だけじゃねえ。お前が工場から盗んだ五百万も取り返しにな」

守泉「なんのことだか、分かんねえな」

瓜那「しらばっくなくても無駄だ。その車、あの工場のもんだろう」

守泉、舌打ちする。

瓜那「改造するついでに、ナンバーも偽装しとくんだったな」

守泉「なぜ五百万をあんたが追ってくるんだ。

ありゃあ、社長が街金から借りたもんだ」

瓜那「その街金からうちが債権を買い取ったんだよ。街金とは元々そういう話でな」

守泉「いずれにしろ借りたのは社長だろう。

取立てならそっちに行けよ」

瓜那「やっぱり知らなかつたか。老松の爺さんな、首くくって死んだぞ」

守泉「：：そうか。死んだか、社長は」

瓜那「てめえが殺したようなもんだろ」

守泉「俺は今忙しいんだ。あんたと関わって
る暇はねえ！」

守泉、脱兎の如く駆け出す。

瓜那「逃がすな！」

駐車場出入口付近に、チンピラ風の男
が二人（チンピラ1・2）、立ちほだ
かる。

守泉、一人を蹴り飛ばし、一人に体当
たりして退け、道路に出て走り去る。

瓜那「追え！」

チンピラ1、2、守泉の後を追う。

瓜那「ここまで来たんだ。必ずとっ捕まえて
有り金残らず搾り取ってやる」

歯噛みする瓜那。

○ 繁華街・裏通り

守泉、後方を気にしながら走っている。

× × ×
後を追うチンピラ1、2。

○ 繁華街・別の裏通り

枝分かれした路地。

チンピラ二人、示し合わせて二手に分かれる。

× × ×
チンピラ1、走って来て角を通り過ぎる。

身を潜めていた守泉、チンピラ1の後ろから殴り掛かり、壁際に追い詰めて連打する。

チンピラ1、呻きながらその場にへたり込む。

守泉、走り去る。

× × ×
チンピラ2、走る守泉を発見し、追跡

を開始、守泉に肉薄する。
守泉、停めてあつた自転車の列を薙ぎ倒して逃げる。
チンピラ2、躓き転倒する。
守泉、反転してチンピラ2を蹴り倒して一気に駆け去る。

○繁華街のはずれ

店舗もまばらになり、商店街と住宅街の境い目の様な街並み。
守泉、フラフラと走って来て、息を切らしている。

瓜那の声「よお、運動会は終わりにしようぜ」

守泉、前を見る。

瓜那が迫って来る。

守泉「クソっ！どこまで……」

チンピラ1と2もそれぞれ別方向から現れ、三方から守泉を追い詰めていく。
守泉、包囲の隙間の方向へ走り出す。

瓜那「無駄なあがきを……」

瓜那、チンピラ1、2は、守泉を追って走る。

○米山会事務所・前

塀に囲まれた、周囲とは不釣り合いな豪壮な建物。

守泉、門の前まで逃げて来て、周囲を見回す。

瓜那、チンピラ1・2、その他にも瓜那の手下と思しきチンピラ風の男が数名、守泉を包囲するように取り巻く。ただし、十数メートルより距離を詰めることが出来ず、一定の距離を取って睨み合っている状態。

チンピラ1、瓜那に駆け寄って耳打ちする。

瓜那、『何だと』という風に、守泉と背後の建物を凝視する。

瓜那「守泉、ここがどこか分かってんのか」

守泉「この辺一带を牛耳ってる米山会の本部

だろ。俺はここに用があるんだ」

守泉、鞆から拳銃（マカロフ）を取り出し、鞆を捨てる。

たじろぐ瓜那とチンピラたち。

守泉「お前ら邪魔だ！失せろ！」

守泉、拳銃の安全装置を解除し、瓜那たちに銃口を向ける。

瓜那「何をやる気だ！」

守泉「こうするんだよ！」

守泉、背後を振り返って、門に向かって銃を発射する。

守泉「（高らかに笑う）」

窓や戸を開ける音、誰何する声など、建物内が騒然となる。

瓜那「気が触れたか、守泉！」

守泉、笑いながらさらにもう一発発射する。

怒号と共に、建物から暴力団員と思しき男たちが走り出してくる。

チンピラたち、蜘蛛の子を散らすよう

に逃げ出す。

瓜那「クソっ、これじゃ手が出せねえ」

瓜那、歯噛みして逃げ去る。

高らかに笑う守泉を、拳銃を持った米

山会の組員たちが取り囲む。

組員1、守泉の胸倉を掴む。

組員1「てめえ、何もんだ！」

守泉「お宅の組長さんを殺せと言われて来た」

組員2、守泉に拳銃を突き付ける。

組員2「ふざけるな！」

組員1、組員2を制して、

組員1「まあ待て。バラすのは後にしろ。ど

いつがバックにいるか、吐かせるのが先だ」

守泉、不敵に微笑する。

○同・事務室内

テーブルの上に守泉の拳銃が置かれて
いる。

組員2、守泉を何度も殴りつける。

組員2「舐めた真似しやがって、この野郎！」

組員 1 ほか数名の米山会組員、周りで見守っている。

守泉は顔面血まみれになっている。

組員 2、倒れた守泉の胸倉を掴む。

組員 2 「誰の命令だ。吐け！」

守泉 「そんなに殴らなくたっていいのに。

正直に吐くつたら」

組員 2 「何い！」

守泉 「青森組の土師って男だ。拳銃もそいつから渡された」

組員 2 「土師：：あいつか。幹部のくせにちよこまかと逃げ回ってやがる：：」

組員 1 「それにしちゃ妙だ。組長を殺すつもりなら、なぜ門の前でヘラヘラしてやがった。わざと俺たちに捕まったように思える」

守泉 「ちつと邪魔者に追い掛けられてまして。

あんた方に追っ払ってもらおうと」

組員たち、顔を見合わせる。

組員 2 「頭おかしいんじゃないかねえのか、こいつ」

組員 1 「よく分からん。小僧、お前の本当の

目的は何だ」

守泉「土師を始末して欲しい」

組員1「お前、組織を売るつもりか」

守泉「俺は青森組とは縁も所縁もない。ダチを人質に取られて仕方なくここに来たんだ」

組員2「なら、土師の潜伏先を教えろ」

守泉「駄目だ。ダチと一緒に女子供が監禁されてる。危険な目に遭わす訳にはいかない」

組員2「じゃあどうしろってんだ」

守泉「俺が土師を誘き出す。そこで奴を始末してくれ」

組員2「(組員1に) どう思います?」

組員1「土師を誘き出したつもりが、逆に俺たちが待ち伏せされてるってことも……」

守泉「俺は嵌めようなんて思っちゃいない!」

組員2「こいつが持ってたマカロフの残弾全部叩き込んで、青森組に送り返すか」

他の組員たち、『そうだ』『やっちゃまえ』などと、賛同の声を上げる。

組員の一人がテーブルの上に置かれた

守泉の拳銃を取り、組員2に渡す。

組員2、銃口を守泉の額に当てる。

目を見開き、歯を食いしぼる守泉。

ドアが開き、側近二名に伴われて米山

段五郎（65）が入って来る。

米山「何事だ。騒々しい」

組員1「組長」

組員たち、さっと静かになり、米山に頭を下げる。

組員2も守泉を離して頭を下げる。

守泉、一瞬力が抜け、床に膝をつく。

守泉「（呟く）あれが、米山段五郎……」

米山。守泉を一瞥する。

米山「誰だ、そいつは」

組員1「青森組の息の掛かった小者です」

組員2「早く始末した方がいい」

米山「ほう」

米山、応接のソファに腰を下ろす。

× × ×

米山、ソファに座り、悠然と守泉を見

下ろしている。

守泉、その脇に膝立ちさせられている。

米山の背後には二名の側近、組員1・2ら組員が周りを囲んでいる。

守泉「組長さん、俺はあんたに何の恨みもないし、青森組に義理もない。土師を始末して、ダチや世話になつた人を助けたいんだ」

米山「言いたい事は大体分かった。だがな」

米山、側近の一人に何事か囁く。

側近、その場を離れる。

米山「この騒動のケリはどうつけるつもりだ。

お前の口先だけを信じろ、うちのもんを危

険に晒せてるのは、虫が良すぎやしねえか」

守泉「信じてくれ。俺は命を懸けてここに来たんだ」

米山「言ったな、小僧」

側近が戻って来て、リボルバー（回転

弾倉式拳銃）と弾丸一発を米山に渡す。

米山「ここは一つ、賭けをしようじゃねえか。

お前が勝ったら土師の始末を手伝ってやる」

米山、弾倉を振り出し、弾丸を込めると回転させて、弾倉を元に戻す。

守泉「賭け……」

米山、リボルバーをテーブルに置く。

ざわつく組員たち。

米山「静かにしろ」

組員たち、沈黙する。

米山「ルールは簡単だ。この拳銃を持って引き金を一回だけ引け。お前の頭に当ててな」

守泉、リボルバーを凝視する。

米山「或いは、俺を狙っても構わんぞ」

米山、自分の心臓の辺りを親指で指す。

どよめく組員たち。

組員1「組長！」

米山「静かにしろってのが、分からねえのか」

組員たち、静まる。

米山「上手くすりゃ、俺の首を持って帰れる」

互いを凝視する守泉と米山。

米山「ただしそのとき、二回以上引き金を引いたら、お前の負けだ。命はないと思え」

組員たち、それぞれ拳銃を確認するよ
うに懐に手をやる。

米山「どうした。悪い話じゃねえだろう」

守泉、リボルバーを持って、ソファに
座る米山の前に立つ。

米山の背後には二名の側近、組員1・
2ほかの組員が周りを囲んでいる。

守泉、銃口を自分のこめかみに当て、
引き金を引く。

撃鉄が落ちる音だけが鳴る。

守泉、不敵な笑みを浮かべて米山を見
下ろす。

米山「(大笑)こいつは、とんでもねえ大馬鹿
野郎だ。面白い。こんな愉快的な気分は久し
振りだ」

○秋奈のマンション・居間

土師、拳銃を持って座っている。

川堀と秋奈、部屋の隅で憔悴した様子。

土師のポケットから携帯の着信音。

土師、携帯電話を取り出し出て出る。

不安気な川堀と秋奈。

土師「おう、俺だ」

守泉の声「守泉だ。米山を殺った」

土師「そうか。確認取れ次第、三人は解放する」

守泉の声「そんな悠長に構えてていいのか。

あんたの居場所、米山会にバレてるぞ」

土師「なんだと？おめえ、喋ったのか」

守泉の声「喋るかよ。あんたがつけられてたんじゃないかねのか」

土師「まさか、そんなはずは……」

守泉の声「迷ってるうちに奴らはそっちに向かっている。あんたがどうなろうと構わねえが、川堀たちが気掛かりだ」

土師、唸って考え込む。

守泉の声「武器は少しでも多い方がいいだろう。あんたから預かった拳銃と、残りの弾を返す。すぐ来てくれ。場所は……」

土師、血走った眼で聴き入る。

○スクラップ置き場

大小様々な機械部品、廃品が置かれて見通しが悪い。

土師、周囲を警戒しながら歩いて来る。廃品の陰から、守泉が現れる。

土師「お前、本当に殺ったんだろうな……いや、まずマカロフを渡せ」

守泉「あの拳銃は……ない」

土師「どういうこった！ てめえ、何考えてやがる！」

周囲の物陰から、組員1、2ほか米山会の組員達が銃を持って姿を現す。

土師「嵌めやがったな、守泉！」

組員1「土師よ、散々逃げ回って疲れたろう。先にくたばった仲間んとこに逝きな」

米山会の組員たち、土師に向かって発砲する。

土師、肩を射抜かれ、もがきながら物陰に身を隠す。

土師「（叫ぶ）やっぱり罨だ。応戦しろ！」

米山会の組員たちとは反対側から、ほぼ同数の青森組の組員が現れる。米山会に比べるとやや着崩れた格好。

双方が発砲し、一帯は銃撃戦になる。

× × ×

守泉と組員1、それぞれ少し離れた物陰に隠れて弾雨を避ける。

組員1「奴一人っていう話じゃねえのか！」

守泉「仲間が隠れてたのか。あいつがここまです筋金入りの臆病だとは！」

組員1「けっ、組長の命令だから今は見逃してやるが……」

組員1、銃で応戦する。

組員1「俺はお前を信用してねえ。覚えとけ！」

組員1、銃撃の合間を縫って、より見通しの良い廃品の山の方へ走って行く。

守泉、銃撃戦の様子を見守っている。

流れ弾が守泉の上方の廃品に当たり、廃品が雪崩れ落ちる。

守泉「うおっ！」

守泉、廃材に足を挟まれて動けない。

× × ×

土師、動けないでいる守泉を発見し、銃撃を掻い潜って徐々に近づいていく。

× × ×

守泉、廃材から足を抜こうとするが、激痛が走るようで、上手くいかずにもがく。

土師が十メートル以内まで迫って来る。

土師「てめえ、よくも俺を嵌めやがったな」

守泉、身をよじり歯噛みする。

土師、拳銃を構え守泉に狙いを定める。

川堀の声「カズくん！」

ワゴン車が土師と守泉の間に割って入り、急停車する。

土師、転倒する。

運転席のドアが開き、川堀が転げるように走り出てくる。

守泉「川堀！」

川堀「どしたの、動けないの？」

川堀、廃材をどけようとする。

守泉「どうしてここが分かった」

川堀「カズくんの携帯のGPS、登録してあったからね……ん！」

廃材が動き、守泉の足が抜ける。

川堀「逃げよう！」

守泉「ああ、その方が良さそうだ」

土師、ワゴン車を迂回して川堀と守泉の方に来る。

土師「舐めるんじゃねえ、クソガキども！」

土師、拳銃を二人に向けようとする。

流れ弾が土師の頭に命中する。

土師、その場に倒れる。

土師の様子を窺う守泉と川堀。

土師、即死状態で絶命している。

守泉「行くぞ」

二人、ワゴン車に駆け寄り、川堀は運転席、守泉は後部座席に乗り込む。

ワゴン車が急発進する。

×
×
×

銃撃戦の中、走るワゴン車。

『土師さん！』『逃がすな！』など、
青森組組員の喚き声と共に、ワゴン車
に向かって弾丸が飛んで来る。

○走るワゴン車・車内

川堀、ハンドルにしがみつき、姿勢を
低くしながら運転している。

川堀「前の方にも青森組の奴らが！」

後部座席の守泉、隅に置かれたたこ焼
き調理用のガスボンベを持ち上げ、ド
ア付近まで運ぶ。

守泉「構わねえ、突っ込め！」

アクセルを踏む川堀の足。

○スクラップ置き場

置かれた廃品によって、進路が狭まっ
ている一画。

数名の青森組組員が、走って来るワゴ
ン車に発砲している。

○走るワゴン車・車内

必死に運転する川堀。

後部座席の守泉、ガスボンベを脚で支えながら、ドアを開け放つ。

守泉、ズボンの尻ポケットからリボルバーを取り出す。

○スクラップ置き場

ワゴン車、散開して避ける青森組組員たちの間を走り抜ける。

○走るワゴン車・車内

守泉、走り抜けざま、ガスボンベを蹴り落とし、それ目掛けてリボルバーを発射する。

○スクラップ置き場

ガスボンベに弾丸が命中、爆発する。その爆炎に足止めされる青森組組員たち。

守泉と川堀のワゴン車、その場を脱出する。

○走るワゴン車・車内

運転席の川堀。

守泉、開け放ったドアから後方の様子を見ている。

川堀「ああ、助かった……」

守泉「こんな記念品、ヤバ過ぎるよな……」

守泉、リボルバーを車外に放り投げる。

○繁華街（夕）

バー『しゃくなげ』の裏口付近。

秋奈の前に守泉と川堀が立っている。

秋奈、守泉を平手打ちする。

秋奈「誰が……誰があの人を殺してくれなんて、頼んだのよ！」

川堀「だってあいつは……秋奈さんに銃を突き付けて脅すような……」

秋奈「そう、あいつはそういう奴よ。でも、

だからって、死ねばいいなんて私は思っていない！」

川堀「それに、カズくんが撃った訳じゃない。

流れ弾に当たったんだよ」

秋奈「（守泉に）でも、敵対する暴力団が待ち伏せてる場所に誘き出したのよね」

守泉「そうだ」

秋奈「あなたの言ってた、強く生きるっていう事？どんな卑怯な手を使ってもいいの？」

目を伏せている守泉。

秋奈、泣き出す。

秋奈「……ごめんなさい。私のために、そこそ体を張って……本当はあなたに感謝しなくちゃいけないのに……駄目だ、私、どうしたらいいのかわからない……」

秋奈、その場に泣き崩れる。

守泉、その場を立ち去る。

川堀、秋奈を気にして振り返りつつ、守泉について行く。

○走るワゴン車・車内（夜）

運転する守泉。助手席の川堀。

川堀「上手くないかないもんだね。またハグしてくれませんか。期待してたんだけど」

守泉「別に、礼を言っただけでいい。あの人が無事ならなことはどうでもいい。あの人が無事なら」

川堀「……カズくんは偉いよ。全然言い訳と
かしたかったしさ」

守泉「男ってのは、そういうもんだ」

川堀「何、それも土方歳三？」

守泉「そうじゃねえけど、歳さんだったらあれこれ弁解はしねえと俺は思う」

川堀、何気なくドアミラーを見る。

ドアミラーに映る一台の車。

川堀「カズくん、あの車、ずっとついて来てるような気がするんだけど」

守泉、運転席側のドアミラーを見る。

続いて窓を開けて顔を出し、後方を確認する。

○道路（夜）

守泉のワゴン車に一台の車が追走して
いる。

追走車の運転席側の窓が開き、瓜那が
顔を出す。

瓜那「守泉！停まれ！」

○走るワゴン車・車内（夜）

運転する守泉、助手席に川堀。

守泉「瓜那だ。しつこいな！」

川堀「瓜那って、闇金の取立屋？」

守泉「ああ、いい加減あそこで諦めたと思っ

たんだがな」

川堀「どうする？」

守泉「逃げるに決まってんだろ」

○道路（夜）

守泉のワゴン車、脇道に入る。

瓜那の車、追っていく。

○山道（夜）

蛇行する山道を走る守泉のワゴン車と
瓜那の追走車。

○走るワゴン車・車内（夜）

運転する守泉、助手席に川堀。

守泉「クソ、この車じゃ振り切るのは無理か。

おい、なんか投げる物ないか」

川堀、身をよじって後部座席をさぐる。

川堀「小麦粉の袋くらいしかないよ」

守泉「それでいい」

川堀「これを？」

守泉「目くらましにはなるだろ。その隙に距離を開けられれば……」

川堀、助手席側の窓を開ける。

川堀、袋の封を切り、車が左カーブに掛かるタイミングで後方に放り投げる。

○山道（夜）

ワゴン車から投げられた袋が、追走車

のボンネットで跳ねて粉が飛び散る。
急停止する追走車。

ワゴン車、スピードを上げて走り去る。
追走車から瓜那が出て来て、フロント
ガラスの粉を払う。

瓜那「ふざけた真似を！」

瓜那、粉を粗方払うと急ぎ運転席に戻り、ワイパーを動かしながら発進する。

○走る追走車・車内（夜）

瓜那、運転している。

前方の待避所に、守泉のワゴン車が停まっている。

○山道（夜）

追走車、停車する。

瓜那、エンジンは掛かったまま車から降りてワゴン車に走り寄り、中の様子を窺う。

ワゴン車内は静かで誰も乗っていない。

瓜那「あいつらどこに……」

車の発進する音が聞こえる。

瓜那が振り向くと、今まで瓜那が乗っていた車（以降単に『車』）に、運転席に守泉、助手席に川堀が乗車し、瓜那の脇を抜けて走り去る。

瓜那「貴様らあつ！」

○ワゴン車・車内（夜）

瓜那、急ぎワゴン車の運転席に座るが、キーはない。

瓜那「くそつたれ！」

瓜那、ハンドルを叩く。

○走る車・車内（夜）

運転席の守泉と助手席の川堀、笑っている。

守泉「あいつ、執念深いくせにどっか抜けてんだよ」

川堀「ワゴン車、結構弾食らってボコボコだ

ったし、丁度良かったね」

○道路（朝）

農村地帯を抜ける田舎道。

守泉と川堀の乗った車が走っている。

○走る車・車内（朝）

運転する守泉、助手席に川堀。

川堀「カズくん、函館行ったらどうすんの」

守泉「まず五稜郭だな。後は函館山の碧血碑にもお参りしなきゃ」

川堀「そういう観光地巡りみたいなのじゃなくてさ。何をやるかってこと」

守泉「そりゃ、まあ、でっかい商売だよ」

川堀「何売るの」

守泉「着いてから考える」

川堀「無計画だなあ」

守泉、川堀の方を向いて悪態をつく。

守泉「うるせえ、そんなに先の事が分かりやあ苦労しねえよ」

守泉が顔を正面に向けると、急に一匹の猫が飛び出すのが見える。

○（フラッシュ）秋奈のマンション（深夜）
猫がいなくなったと告げる樹里亜。

○走る車・車内（朝）
急ハンドルを切って避ける守泉。
絶叫する川堀。

○空（朝）
明るくなり始めた空が広がる。
タイヤの軋む音が響く。
車が横転、激突する音が轟く。

○道路脇（朝）
二人の乗った車、道路脇の石垣に突っ込んで前半分が大破している。

○大破した車の中（朝）

血まみれの守泉と川堀。身体は大破した車に押し潰され上半身しか見えない。

川堀「……しようが、ないなあ……なんで、ここでしくじるのさ……」

守泉「あの子が探してた、猫のことを、思い出しちゃった……」

川堀「……見たことも、ないくせに」

守泉「なんとなく、そんな気がしたんだ……」

川堀「こんなところに、いる訳……ないでしょ」

守泉「違いねえ……（宙を仰いで）歳さん、俺はやっぱり、あんたみたいになれ、強くなれ
そうに、ねえよ……」

川堀「ううん、カズくん……俺、思うんだけどさ、そういう優しさは、きつと、強さの証しって言うか……」

川堀、がっくりとうな垂れる。

守泉「……優しい？俺が？……（微笑）考えたことも、なかったな……」

守泉、手を川堀に伸ばそうとする。

守泉「川堀……おい、川堀……」

川堀、動かない。

守泉、ごぼつと血を吐き出す。

守泉「馬鹿野郎、ばっくれてんじやねえよ」

守泉の手が、力なく垂れ下がる。

○道路脇（朝）

大破した車。

周辺は、何の変哲もない田舎の風景。

その遥か上には、空が広がっている。

○秋奈のマンション・外

樹里亜、猫を抱いて、頭を撫でている。

樹里亜「お帰り、ミーちゃん」

樹里亜、空を見上げる。

その視線の先には、やはり大空が広がっている。

（了）

※『燃えよ剣（下）』司馬遼太郎著（新潮社）

より台詞一部引用